

三四米)の上に碑石(高一・六五、巾〇・三、厚〇・二米)

二瀬本小学校 飲用水道工事記

発起 学校長

三三四 所在地 大字大見口(平田)

一金五円 後藤 恒

部落入口左側に、碑が建立されてある。石切で(巾〇・六九、

一金百四拾円 柏村 補助

高〇・四三、厚〇・二米) 碑表面に、

村長 甲斐今朝義

平田上水道記念 昭和四十一年三月、工費 九十五万八千円

委員 一金拾五円 後藤 松齡

也、本管二、七六〇米

全 山村 卯三

裏面に、組合員 工藤一男外六名 寄附者 工藤久志外八名

一金拾円 山辺 末彦

の銘あり。

〃 五円 佐藤今朝熊

全 小崎 義実

三三五 所在地 大字上差尾(百枝)

世話人 外十名

部落内(岩下線入口)四又路右側に、碑が建立されてある。

一般寄附

水道記念碑 工藤唯秋外十二名、昭和三十一年十月建設と、銘

一、水源池一畝 山辺鹿八 外数十名の記名がある。

あり。

碑は自然石(巾〇・八〇、高一・五〇、厚〇・一三米)台石

基礎玉石練積の円形で(下巾一・六、上巾一・〇、高一・一

自然石(高〇・五〇、巾〇・九五米)基礎(高〇・九五、巾一・

米)台石(巾〇・四五、高〇・二六米) 碑は(巾〇・五七、

二〇米の円形の玉混)

高一・二四、厚〇・一三米)自然石

七、土地改良

三三五の二 所在地 大字柏

三三六 所在地 大字馬見原(山下)

旧柏郵便局舎の裏に碑が建立されてある。正面に、通水記念

町道右側に、土地改良記念碑が建立されてある。

昭和四年十一月竣工とあり、台石に次のように記されてある。

碑文

山下地区は、約二十町の耕地の内、水利の便が悪いため、殆ど畑作経営であったが、昭和三十四年土地改良区を設立し、五ヶ



瀬川に堰堤を設けて揚水し、畑地を開田して、増産を図ることにした。組合員は、町役場の設計援助をうけて、この工事に全力を注ぎ、着工後、二年余にして、事業を完遂したものである。

台座銘記文

山下土地改良区

設立 昭和三十四年十二月十八日

竣工 〃 三十六年七月二十五日

用水面積 四町七反

水路総延長 八八三米

総工事費 七、〇七一千元

内 長期借入金四、九九〇千元

生産米価六十疋 四、二八九円

組合長 本田清隆

外役員十二名の銘記あり。

碑石 自然石（高さ〇・九三米、巾〇・八米、台石二段 高

〇・四三、上巾〇・四六、下巾〇・七五米）

基礎 割石積（高〇・九七、巾一・四〇米）

石工 矢部町上川井野

山下 学

昭和四十一年建之 と銘ある。

三三七 所在地 大字柳井原（中村窪）

部落はずれ三又

路に、農業構造改

善事業竣工の記念

碑（磨石 横〇・

七六、高〇・五五、

厚〇・二二、中台

横〇・九八、巾〇・

六五、厚〇・三二米に巾一・五〇、高一・四〇米の自然石の上

に建立）が建立されてある。



碑文

三三八 所在地 大字橋(栂山)

(正面) 上部に蘇陽町農業構造改善事業、中央に水田基盤整備記念、下に柳井原水田基盤整備共同施行組合、と銘あり、裏面に、昭和四十五年建之 蘇陽町長 片岡正行書とあり、台石の正面に、柳井原前田は、従来一四三筆二六七枚の耕作不便な耕地であったが、昭和四十四年度、農業構造改善事業で、九四枚に整備し、併せ用水路排水路及び道路の改修を行い耕作の便を図ったのであり、所要経費は、次の通りである。工事前水田面積一二七、五二六平方米、整備後水田面積一二〇、五二七平方

公民館前に記念

米、工事費二二、〇三〇千円、国庫補助金一一、〇一五千円、

碑が建立されてあ

県費補助四、四〇六千円、町補助金二、二〇三千元、地元負担

る。基礎円形にて、

金四、四〇六千円

高一・〇、巾一・

台石左側に、蘇陽町長 片岡正行、企画課長 佐藤幸孝、工

八米、台石も円形

事請負者 熊本ブルドーザ建設株式会社々長 佐藤惟宗、現場

で巾〇・八、厚〇・

主任 蓼田岩見、共同施行者代表 井上宗春

三四米の上に高

右側に、施工委員会 委員長 佐藤 恵、委員 斗高俊治、

一・三五、巾〇・五米の碑である。

佐藤幸人、渡辺熊彦、田中一幸、森下輝義、中島今朝満

碑文

後側に、共同施工者 柳井原・春田義治 外二十一名の住所

昭和三十八年度蘇陽町栂山地区非補助土地改良事業として、

氏名、石工 矢部町下市吉田、と記されてある。

機械ポンプ揚水開田事業を計画し水源を川走川に求め、高低一

四三米、導水管三九〇米を機械揚水す。受益面積一六丁六反、

当時玄米六十K三、八〇〇円。

起工昭和三十八年十月二十一日、竣工昭和三十九年六月十七

日、総事業費一、八三〇万円、総工事費一、七五二万円、雑費

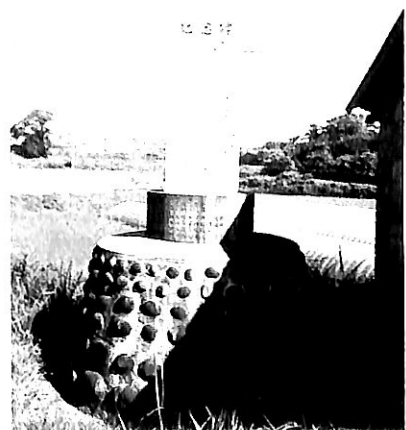
七八万円、財源一、四六四万円、農林公庫融資三六六万円、地

元負担

工事請負者機械一式 福岡 蔵田商事 藤川 巧・甲斐竹房

町会議員 渡辺定光・有働利男、農協長 淵野薫、栂山土地

改良組合長 江藤一正外二十四名の銘あり。



八、その他の記念碑

三三九 所在地 大字今

役場玄関左側に、庁舎建設記念碑が、昭和三十六年九月建立されてある。

碑文

昭和二十八年九月一日法律第二五八号に依り、町村合併促進法が制定公布され、昭和三十一年九月三十日、旧馬見原町、旧柏村、旧菅尾村が合併し、蘇陽町が誕生した。合併後、庁舎位置決定迄、実に四年六ヶ月を経、昭和三十六年三月二日町議会に於て万場一致をもって、本位置に決定され、全年五月三十一日起工し、全年九月四日竣工する。

総工費 一金八百六拾万円也

建坪 一階 一四五坪

二階 八〇坪

計 二二五坪

敷地 四五〇坪

昭和三十六年九月

碑の東面に

寄贈者 庁舎建築用地

西面に

一、参百坪 今村虎熊殿

合併時の町村長議長

旧馬見原町長 工藤保蔵

全 議長 本田清隆

旧柏村 村長 小崎正行

全 議長 甲斐勝己

旧菅尾村村長 山中説眞

全 議長 田中 進

初代 町長 興梶護久

台石に

蘇陽町長 片岡正行

助役 興梶護久

収入役 今村親雄

建築委員

町議会議長 本田清隆

副議長 穴見重雄

全議員 田中 進

〃 有働 実

〃 倉岡正治

〃 森田成美



町議会議員

小屋迫 要 甲斐 勝己

渡辺 定光 後藤 続

田中 一幸 吉田 虎光

橋本今朝鶴 増永 勇

甲斐 美雄 藤原 一正

米石 保義 佐藤 当

田中案山子

古川 俊次

後藤 定一

施工者 飯干建設 飯干 圭一

石工 吉田 義造

基礎 割石積(上巾一・二五、下巾一・六五、高〇・九六米)

台石(巾一・四三、高〇・二米)

碑石(巾〇・九、高〇・五四米) 全高一・七〇米

三四〇 所在地 大字今

町営グラウンドに、陸上自衛隊の協力により、昭和五十二年

七月に完工した完成記念碑が建立されてある。

碑文

この町営グラウンドは、町民の健康増進と、レクリエーションの場として建設したものであり、造成については、高額な費用を要するため、陸上自衛隊第八師団第八施設大隊の部外工事として師団の御協力により完成したものである。

ここに、その功績を稱えると共に、地権者各位へ敬意を表し建立する。

昭和五十八年四月建立

当時の役職名

町長 片岡正行

助役 玉目鉄雄

収入役 有働一人

町議会議長 森田成美

副議長 藤川 巧

議員 本田万治

古川俊次



〃	田中一幸	教育委員長	田上千尋
〃	中村一男	教育長	斗高俊治
〃	山中典紀	委員	興柁 学
〃	興柁政滉	委員	興柁 学
〃	後藤松壽	〃	原田正宣
〃	田上都喜雄	〃	西川幸吉
〃	工藤安雄	〃	〃
〃	有働利男	第八師団長	飯山 茂
〃	後藤末人	〃	〃
〃	後藤 續	〃	〃
〃	嶋田輝雄	〃	〃
着工	昭和五十二年二月	〃	〃
竣工	〃 五十二年七月	〃	〃
総面積	四三、〇〇〇平方米	〃	〃
総事業費	一三、四〇〇千円	〃	〃

記念碑文 第八師団長 陸将 飯山 茂書。

碑は自然石で、基礎岩石(巾三・八五、高〇・六五米)台石

(巾一・六、高〇・五五米) 碑石(下巾〇・六五、上巾一・〇

厚〇・五六、高一・七五米)

三四一 所在地 大字柏(溜渕)

県道河内く矢部線沿い、町道玉目線入口三叉路に自然石の記念碑が建立されてある。

碑石に 溜渕公民館建築記念碑

佐藤 満 書と銘記されてある。

基礎(高一・三

二、巾一・七、下

巾二・〇米)の上

に、自然石の台石

(巾一・〇、高〇・

四米)碑(高一・

六三、巾〇・三

〇・四、厚〇・一五米)全長三・三五米の碑である。

台石の上部に、溜渕公民館 昭和四十一年六月十八日落成

顧問 佐藤 満・小崎正行・下間基廣

建設委員長 佐藤 當・副委員長 小崎 勉

委員八名 土地提供 小崎正行 設計 後藤義雄

請負者 山下一男、関係者三十五名の記名あり。

鉄骨平屋建 三十二坪

工事総額金百七十七万七千二十七円

現住人口 二百十二人 と銘記あり。



三四二 所在地 大字高畑（宮の下）

高畑部落入口三

叉路右側に、全長

五・一米の記念碑

が建っている。阿

蘇地域は昔より、

農耕及軍馬として、

馬の生産・育成が

盛んであった。この種牡馬ノーベル号は、甲斐定熊氏が大分県

より購入され、大変繁栄した種馬であつて、その優秀を賞えて、

記念碑が建てられているものである。



碑文に 経歴

種牡馬、ノーベル号の産地タルヤ、愛知二生、大分東大分村池

永豊吉ノ手ニヨリ明治三十四年甲斐定熊氏の手ニ移り、氏ノ愛

馬ト也、最良仔ヲ生、氏亡スルヤ、続テ、義弘氏ノ管理宜敷得、

馬改局ヨリ奨励金ヲ受ケシコト、十一回ニ及ビ、之本郡産馬改

良ノ元トシテ、不憚干時大正八年一月七日年廿二才ニシテ死セ

リ、良馬ノ長生シタルコト普ク賛シ且地下座ス甲斐氏ノ靈ヲ慰

為諸士相図立之

大正八年十二月十日立之

台石に

サラブレット 雑種

青毛 体尺 五尺四寸

明治廿二年生

特徴 珠目下波分左右一白とあり

世話人高畑三名・高辻三名外二十五名の寄附者名がある。

三四三 所在地 大字上差尾

小学校々舎上の丘に、石塔が建立されてある。台石切石三段

（下石巾一・一〇、厚〇・二米、中石巾〇・七、厚〇・二二米、

上石巾〇・五、厚〇・二四米）の上に自然石（巾〇・三五、高

〇・七四、厚〇・二一米）が建っており、正面に山神塔とあり、

柏村長 奈須宗三郎 昭和十三年十二月吉日、左側に、柏村大

字上差尾全部 建設敷地六十坪、裏面に「碑文」 支那事変ニ

タイシ皇軍ノ戦勝ヲ祈願シ部落民協力一心従来軍人歓送迎地ニ

山神塔ヲ奉設ス。とあり。

柏村長 奈須宗三郎、元弘道会長、元村会議員 興梶市三郎、

方面委員、村会議員 興梶又次郎、在郷軍人分会長、村会議員

穴見重雄、区長 興梶豊喜、世話人 藤原品十、石工 藤原岩

太郎、寄附 工藤熊之十、外四十 の銘あり。

第8編 その他(自然石等)

各項目に、当てはまらない石造物及び自然石造関係をこの項にまとめて登載したことをおことわりして、次の通り列記した。

三四四 自然石(夫婦岩)

所在地 大字滝上(下番)

馬見原を流れる、五ヶ瀬川に架す、三河橋の西詰に馬見原夫婦岩がある。北側が、高さ五米、廻り六米、南側が高さ六米、廻り十米、道路面より自然石が両側に立っている。其の岩の合

間が九米の大注連縄がかげられ奇観を呈している。縄の廻り、中心部は一米余り、この縄に、七・五・三の房、飾りが十五個あり、長さ〇・四米、廻り〇・三米、縄の総延長は三十米あり、注連縄の仕上げは氏子連の一日の奉仕作業で作られ、祭礼は十一月二十三日である。この注連縄は、全国の国道上、唯一ヶ所



の大注連縄である。

この下を通ることにより、家内安全と武運長久が祈られると伝えられている。

此の夫婦岩を祭祀するようになった時代は、その記録は残っていないが、伝承によれば、文明年間(一四七三〜一四八六)の頃、住民の家内安全と農作物の豊穰と、旅人の安全を祈り、自然の奇岩の美しさに花をそえるかのように、注連縄を献して祭祀されてきたものと、云われている。

三四五 尊徳の像

所在地 大字菅尾(大久保)

小学校々門右側に、二宮尊徳の像が建立されてある。時の農業委員会委員の方が、小学校に寄贈されたものである。

基礎(巾〇・九五、厚〇・一五米) 台石(巾〇・六七、厚〇・四二米)

塔身(巾〇・四七、高〇・七四米)

の上に台石下段

(巾〇・四四、厚

〇・〇六米) 中段

(巾〇・五四、厚



○・一三米) 上段(巾○・四二、厚○・一米)の上に、高○・七五米の像が建ててある。

寄附者

農業委員長 今村 勉

農業副委員長 甲斐 弘

委員 中村熊彦、興梠辰熊、後藤浅市

藤屋義兼、宇都宮三男、倉岡時男

大原 亀、多津田 勲、田中 勝

山村久喜、興梠幸森

書記 立田 猛 と銘がある。

三四六 恵比須神

所在地 大字二瀬本(宮ノ下)

公民館の横に恵

比須様の像が建立

されてある。台石

(横一・〇八、縦

〇・六米) 像高

(〇・八、巾〇・

三七、厚〇・三七

米)



此の神は小屋迫家の守護神として古くから尊崇せられ、瀨野家清酒(春海)醸造当時は、商売繁昌の神として崇敬せられ、現在は十月二十日、二瀬本名店会全員大神大祭を行い、角力等も催され、式典も盛大をきわめている。

三四七 血盛の墓

所在地 大字二瀬本(宮ノ下)

小学校入口右側畑に、無名(縦○・四、横○・二米)の自然石が建っている。この地は、天正十四年正月(一五八六)島津、高千穂軍勢、高森城攻略の途次、柏城も攻略した当日城主柏民部大輔は浜の館にありて此の報をきき急ぎ帰城するに戦死者は多数に及び城下は血の海と化し、激戦の跡生々しく死骸は、城下牛込に埋葬し、千人塚と名づけ、宮の下激戦地を血盛と名づけ現在に至るまで香煙の立ちのぼりを見る。

三四八 鬼の門(自然石)

所在地 大字高畑

部落内の町道を進むと、通称「鬼の岩門」と云われ、大きな自然石が両側にたっており、將に「鬼の岩門」の表現に合っている所で、右側の岩石の高七・〇、周一〇・〇米、左側高六・〇、周一〇・〇米あって奇岩を呈し、丁度門のようになってい

るところから昔から村人は「鬼の岩門」と呼ばれ、今にも鬼が出そうな断崖上に聳えている。

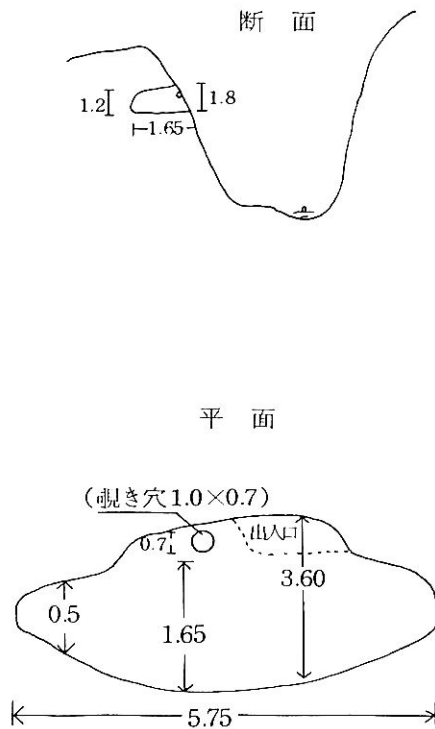
三四九 鬼の岩屋（自然石）

所在地 大字高畑

鬼の門より東北方の谷向うの対崖の中腹に（徒歩約二〇分）通称鬼の岩屋、又鬼の味噌倉と呼ばれているところがある。そり立つ岸壁の middle に畳三枚位の広さの洞窟がある。出入口の横の岩に約〇・七米の円型の穴が穿かれこれより遠望が出来る。色々と伝説はあるが、一説では



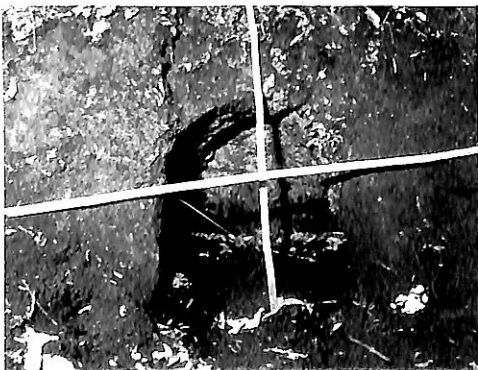
この対崖上に昔高畑城ありて、この岩穴より監視をしていたところとも伝えられるが詳かでない。又昔鬼の釜と呼ばれたところも近くにあったが、今は釜の岩跡はなくなっている。



三五〇 岩風呂（自然石）

所在地 大字高畑（湯の元）

鬼の岩屋より約七、八百米程行った地点（川走川支流の上部）の急傾斜を下った、杉、竹山の山腹に、岩盤状のところがあり、ここに昔から岩風呂の跡と云われる所がある。間口（縦〇・七、横〇・四五米）奥行、約一・一五、横巾一・一米の大きさであ



り、昔、蒸し風呂として使用された所と云われている。此の附近を「湯の元」と呼ばれている。

三五二 川風呂（自然石）

所在地 大字高畑（湯の元）

岩風呂地点より約五十米下ると、川走川支流の小川に出る。逆ること約七十米程の地点右側に良質の湧水地点が数ヶ所あり此の岸壁に数ヶ所の横穴の跡が見られる。（洪水や凍害等で大分破損してきている）

昔、川風呂（岩風呂）として使用された跡と云われるところで、此の附近を「湯の元」と呼ばれている。

- ② 大字長崎の下長崎地区五ヶ瀬川沿いに「蛇淵じよぶち」と呼ばれるところに明治の末期まで使用された川風呂（岩風呂）がある。
- ③ 大字今字風呂の上と云うところにも岩風呂として使用されたと云われるところがある。

三五二 川風呂（自然石）

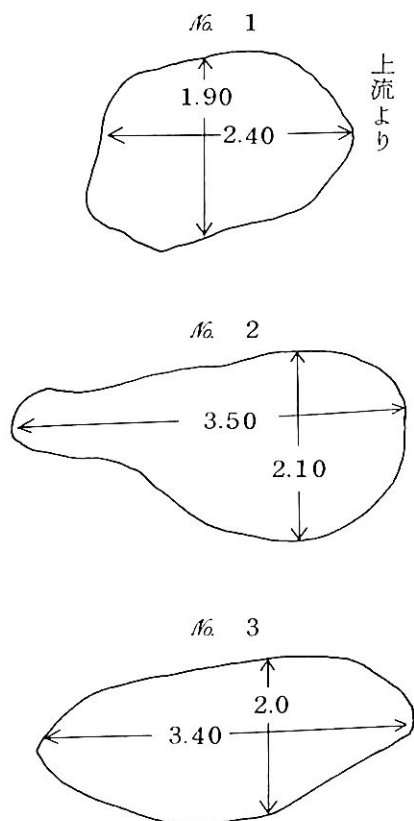
所在地 大字橋（椀山）

部落より約五・六百米下ると川走川に出る。下流に沿って約六百米程下った右側に、川床の一部である岩盤に大きな穴が三ヶ所目につく（一番下は、洪水等の為か、土砂に埋まっている）。

る。湯壺は天然の穴に一部人工が加えられたものと思われるが、昔時川風呂として使われたところと云われている。

（川風呂は、川原で川石を数十個焼いて、これを投入し温水化して入浴していたと云われている）

形状、大きさは次の通りである。



三五三 自然石(その他)

所在地 大字長崎(下長崎)

部落の中に妙見さんと呼ばれている所に自然石の碑が二体ある。右側(下巾〇・二、中巾〇・三三、高〇・五五米)無名 左側(巾〇・三四、高〇・四五米)無名 詳しくは不明である。この右下に二十年程前まで使用されていた水源池があるが、水道施設により今は使用されていない。

三五四 手洗石

所在地 大字大見口

お堂前に手洗石がある。基礎(横〇・七八、高〇・三八、縦〇・五米)台石(巾〇・四三、厚〇・一五米)洗石(巾〇・三二、高〇・三一、厚〇・三二米)阿蘇郡大見口村阿浪万之十、明治十八年九月廿日と銘あり。

扇を広げた末広がりのでたい形で、扇の中央に桐の紋章があり偉厳を感じる。

三五五 手洗石

所在地 大字滝上(土戸)

圓福寺境内横に手洗石がある。奉寄進嘉永七年(一八五四)寅七月。当村新吉と刻みあり、自然石(〇・三九、〇・三四、

〇・三、〇・二六、〇・二五米)の五角形で高〇・四五米のものである。

三五六 手洗石

所在地 大字高辻

薬師堂の前に、相当の時代を経たと思われる手洗石がある。高〇・四一、巾〇・四、手洗口深〇・一六、円径〇・三米のもので年号がはっきりしないが、奉寄進□□未八月 日、駄原村市治の銘がある。

参考及引用文献

肥後国誌、肥後讀史総覧、国郡一統史、日本史、阿蘇郡誌、県文化財資料、熊本県文化財ハンドブック、梵字手帖、仏像案内、菅尾手永史、工藤家八田家古文書、高森町資料、史料阿蘇、国史研究年表ほかを引用させて戴きました。